

イルゼ・アイヒンガー *Das grüne Märchenbuch aus Linz* と *Landschaften und Wetterlagen der Existenz* における シオランテキストの役割について

真 道 杉

1. はじめに

2004年以降のイルゼ・アイヒンガー執筆テキストにおいて一貫して見られる E.M. シオラン著作の引用については、その傾倒ぶりが顕著であることがすでにいくつかの先行研究において指摘されている。その中でも詳細な研究を行っている Françoise Rétif による原典調査研究やその後続研究である執筆者による引用の原典調査研究が原典の特定及びそのテキストが持つ役割について研究を進めているが、いまだ原著の箇所が不明なもの、また Rétif が主張している通りアイヒンガーのテキスト自体に隠れているものも多く、全容が解明されているとは言えない。¹⁾

もともと *Schattenspiele* (影絵) と題されていた後期の短文シリーズのうち 2005 年に書かれたものの一部を抜粋して一冊にまとめられた作品集が *Subtexte* (サブテキスト) として上梓されたが、²⁾ これらのテキスト及びタイトルにおいては実像と影、テキストとサブテキストという二重構造が大きな特徴である。アイヒンガーのテキストを伴走するように引用されているシオランのテキストはそれ自体アイヒンガーのテキストに対峙する「サブテキスト」として位置づけられる。ここでいう「サブテキスト」の手法はドイツ教養小説が物語の中に様々な引用や文学者、哲学者などの名前を織り込み、その主人公だけでなく読者をも物語世界のみにとどまらない教養の世界へ誘い教養世界を広げさせる手法を踏襲しているとも言えるし、文学というジャンルそのものが持つ一つの特徴的な要素でもあるといえる。アイヒンガーのテキストを読むと、読者は必然的にそのままシオランのテキストにも誘われる。そうして多くのアイヒンガー読者はシオランのテキストを手取ることになるのだが、学術書のように引用に注釈がついているわけでもないアイヒンガーテキストから元の箇所を探し出しな

がらシオランの世界に近付くことは至難の技である。読者は様々なシオラ
ンテキストの迷宮の中へと踏み込み途方にくれるが、それと同時にアイヒ
ンガーとシオランが放つ絶望した人間の言葉の共振を読み取り、またシオ
ランが哲学的なアプローチで述べた言葉をアイヒンガーがそのテキストで
軽々と実践している様を見てとるのである。

複雑に絡み合ったインター・テキストを解明してゆくには一つ一つのテ
キストを丁寧に読み解くしか方法はない。

本論ではそうしたアイヒンガーとシオランのテキストを Edition
Korrespondenzen から 2005 年に刊行された *Subtexte* 中の *Landschaften
und Wetterlagen der Existenz*³⁾ と同出版から 2004 年に刊行された単行本 *Der
Wolf und die sieben jungen Geißlein*⁴⁾ 中のアイヒンガーによる前書き *Das
grüne Märchenbuch aus Linz* を扱い検討してゆく。この 2 つのテキストを扱
う理由は、主に以下の二つである。

1. *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* というテキストは非常に短いもの
でありながら敢えて単行本として出版されている特殊なテキストである。
本論で扱う前書きはアイヒンガーが *Schattenspiele* のシリーズを書
いていたのと同時期に書かれており、シオランのテキストの影響が色
濃く表れていること。
2. *Die Wettervorlage des Existenz* の中に *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein*
についての言及があり、両テキストには密接な関連があること。

本論ではその両テキストにおけるシオランの引用に焦点を当てて扱うこ
とによって、アイヒンガーテキスト相互におけるインターテクスチュアリ
ティとそこにおける引用方法を考察する。

2. *Das grüne Märchenbuch aus Linz* におけるシオラン

単行本 *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* は 2004 年に Edition Korrespondenzen
から出版された、全編たった 25 頁の小本である。その 25 頁の中にアイ
ヒンガーが書いた前文、*Das grüne Märchenbuch aus Linz*、ヤーコプとヴィ
ルヘルム・グリム兄弟の書いた *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein*、そ

れに続いてアイヒンガーの書いた *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein*, 最後に Simone Fässler の後書きが続く。Fässler の後書きにあるように、本編となるアイヒンガーの *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* は 1974 年に Moos Verlag から出版されたアンソロジー *Märchen, Sagen und Abenteuergeschichten auf alten Bilderbögen neu erzählt von Autoren unserer Zeit* のために書き下ろされた作品である。⁵⁾ 1968 年にはアイヒンガーは戦後 15 年ほど携わっていた Gruppe 47 から別れを告げ、また 1972 年には夫 Günter Eich が死去している。本作はその後の時期に書かれたものである。同時期の作品としては、船着場の鉄道駅を舞台にしたラジオ劇 *Gare maritime*⁶⁾ がある。それからちょうど 30 年の時を経て、改めて Edition Korrespondenzen の編集者である Reto Ziegler の目に止まり単行本として出版されるにあたり新たに本論で扱う前書きが書き下ろされた。

Rétif が指摘するように、アイヒンガーがシオランを初めて *Schattenspiele* に引用したのが 2004 年 7 月 9 日のテキストである。⁷⁾ *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* の出版年が同年であるので、シオランを読み始めた時期にこのテキストが成立していることになる。その時期にはすでに *Sylogismen der Bitterkeit*, *Die verfehltte Schöpfung* および *Nachteil, geboren zu sein* や *Geviertelt* をアイヒンガーは読んでいた。⁸⁾ 強烈なオレンジ色の文字で黄色い表紙に印刷された Suhrkamp Taschenbuch の E. M. Cioran の名前がまだ若きフランツ・ヨーゼフのポートレートの下グレーのテーブルの上に光っているカフェ・デーメルでこの文章は書かれた。⁹⁾ 歴史と現代、くすんだグレーと強烈なオレンジ色という鮮烈な対比。そのオレンジ色のシオランの名前と新たな対比として、アイヒンガーの記憶の中の金色のタイトル文字で飾られた緑のメルヒェン本 (*das grüne Märchenbuch*) が浮かび上がってくる。Rétif はここからシオランとグリムの対比へと論を進め、その中の「生誕」と「失望」へ論を展開してゆく。また同時にアイヒンガーのシオランテキストの扱いについては「パリンプセスト的な書き方」(*das palimpsestische Schreiben*) と評している。¹⁰⁾ パリンプセストとは羊皮紙が使われていた時代に元々書かれていたテキストを消してその上に別のテキストを書く手法を指す。Rétif はアイヒンガーテキストにおけるシオランの引用にはそのままの引用に混じってモンタージュや上書き、つまり自分の表現でシオランのテキストを覆い隠すほどの言い換えなども混じってい

ると指摘している。¹¹⁾ そのような評価となった一つの背景として、Rétifが表にして示した引用の一覧表のなかで「？」マークで不明とした箇所が11箇所もあったことが考えられる。執筆者のその後の調査ではRétifが不明としたうちの7箇所は引用箇所が明らかになっている。¹²⁾ つまり、Rétifが「パリンプセスト的な書き方」と評価する前提とした調査に比べ実際のアイヒンガーテキストは原文に忠実であると言えるが、それでもまだ原文が不明な箇所は残る。Rétifが指摘した通り、アイヒンガーがシオランテキストを「哲学的なアクロバット」のモンタージュで取り込み、彼の思想を換骨奪胎したという面は確かにあるだろう。¹³⁾ この引用箇所である「哲学的なアクロバット」という表現は、今回の調査でも引用元が明らかにできなかった。この表現にはアイヒンガーがシオラン引用を用いる際の決定的な一つの姿勢が反映されていると考えられるが、詳細についてはまた別の機会に論じたい。

以上のような前提を踏まえて、*Das grüne Märchenbuch aus Linz* において今回注目したいのは以下の箇所である。

»Die Untröstlichkeiten aller Art gehen vorbei, aber der Grund, dem sie entspringen, bleibt immer.« Auch die frühen Tröstungen gehen vorbei und lassen ihre Gründe zurück, auch ihre Farben, das von dem Schatten abhängige Licht, das sie umgibt. Es waren Linzer Schatten, die über das erste Märchenbuch fielen, dunkelgrün mit dem abblätternden goldenen Titel lag es auf dem Linzer Holzfußboden neben dem Bett, es lag ihm nicht daran, aufgehoben zu werden, es standen auch nur fünf oder sechs Märchen darinnen, und nicht in der Grimmschen Urfassung. Sie wurden uns auch nicht vorgelesen, sondern erzählt, aber wer immer sie erzählte, legte das dunkelgrüne Buch auf die Knie oder neben sich.¹⁴⁾

「あらゆる種類のやるせなさ」(Untröstlichkeiten aller Art) が「過ぎ去って」(vorbei) も、その「原因」(Grund) は「いつまでも残る」(bleibt immer)。その場の感情はその時々過ぎていってもいつまでも渾々とその「原因」(Gründe)から湧き出てくる。「慰め」(Tröstungen)も過ぎ去るが、その「原因」もそして、「色」(Farbe)も「その色を取り巻いて、影によって変わる色」(ihre

Farben, das von dem Schatten abhängige Licht, das sie umgibt) も残る。ここで光を支配して左右するのは影である。光が影を支配するのではない。「最初のメルヒェン本」(das erste Märchenbuch) の上に影を落としたのは「リンツの影」(Linzer Schatten) であった。リンツは幼少期にアイヒンガー一家が住んでいた町であり、またヒトラーもこの近くで生まれて青年期までを過ごしている。グリムのメルヒェンもドイツ民族に綿々と語り継がれた物語であり、アイヒンガーもそしてヒトラーやナチスも同じ物語を聞いて育った。そのメルヒェン本に書かれたメルヒェンはグリムが書いた「元のお話」(Urfassung) ではなく、またグリムの本は大抵は開かれることなく、「読み聞かせるのではなく、語り聞かせ」(nicht vorgelesen, sondern erzählt) ていた。物語は語り聞かせる人の記憶の物語であり、その物語は自分の語り方で伝える昔ながらの口承文学の形式を踏襲して伝えられている。このテキストの最初の頁にはシオランの引用であろう箇所が2箇所あるが、今回の調査では原典が特定できなかった。敢えてこのように物語の語り方をここで記し、また同時期に多くのテキストにおいて特徴的に引用されているシオランをここでも引用し、その本とグリムの本を並べて書いているところには、アイヒンガーの一つのテキストの戦略を読み取ることができるであろう。このテキストはアイヒンガーがその後もシオランを引用する際の一つのスタンスを表していると考えられる。つまり原文 (Urfassung) をそのまま引用するだけでなく、グリムの物語を自分の言葉で語ってくれたおばあさんと同様に自分の言葉で語ることである。Rétifがいった「パリンプセプト的」な語り口は口承文学における自由な語りとも重なるが、アイヒンガーの語り口は元のテキストを消して全く別のテキストを書くわけではない。「本を膝の上か脇に置いて」(legte das dunkelgrüne Buch auf die Knie oder neben sich), その本を常に物語を聞いている者に見せつつ、自らの言葉で語り直す。アイヒンガーがシオランの本を積み上げてカフェ・デーメルテーブルの上に置き、表紙の色を印象的な色の表現で敢えて描いている場面はまさにグリム童話を語って聞かせてくれた祖母たちの語り的手法を踏襲していると言えるだろう。この本との距離がシオラン引用、また他の引用にも共通するアイヒンガーのスタンスであろう。

「ヤコブとヴィルヘルム・グリムがアナーキーとは遠く、そこにあるものをそのまま手にし」(Jakob und Wilhelm Grimm sind weniger anarchisch, sie

nehmen, was ihnen geboten wird.)¹⁵⁾、「集めたものを自分たちの周りにいる国民を信じてその手に託した」(Sie vertrauen ihre Sammlungen dem Volk an, das sie umgibt, und legen es in seine Hände.)¹⁶⁾。集めてきた物語とそれを語って聞かせる相手に対する無防備なまでの信頼やグリム童話に見られる無邪気な感情をシオランやアイヒンガーに見ることはできない。「あらゆる感激を監査しようとするシオランの気持ちは果てしない。」(Seine Lust, jede Begeisterung zu revidieren, ist unerschöpflich.)¹⁷⁾ 目の前にあるものへの素朴な感激を自国の国民と共有して伝えようとするグリム兄弟とその国民は、ナチスドイツを経験したアイヒンガーの目には、「彼らも国民もそれほど無邪気なわけではない」(aber arglos sind sie so wenig wie dieses Volk.)¹⁸⁾ と映る。それが、アイヒンガーの言葉によって語り換えられた *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* へ結実する。¹⁹⁾ 1972年にアイヒンガーがこの物語を書いた時には *Das grüne Märchenbuch* は彼女の膝の上に置かれていたのかもしれない。が、そこから紡ぎ出された物語は彼女が語り聞かされたものではもはや有りえなかった。そして、2004年に同じ物語を読者に届けようとする彼女の傍には *Das grüne Märchenbuch* に代わってシオランの本があった。

素朴な感激に押し流されてナチスに容易に加担したドイツ国民に対する不信は、ここでシオランの持つ感激への監査に共感するアイヒンガーの冷めた視線へ投映されるが、アイヒンガーはシオランからもグリムと同じように距離を取る。「シオランとグリム兄弟に続く道はどこへ行くのだろうか?」(Wohin geht der Weg nach Cioran und den Brüdern Grimm?)²⁰⁾ アイヒンガーの「監査」はシオランにも向けられる。がしかし、グリムを書き換えたような大胆な変更をアイヒンガーはシオランのテキストでは行っていない。その後、同じスタンスを保ちながら、シオランのテキストは *Subtexte* においてアイヒンガーテキストを常に伴走している。

3. *Landschaften und Wetterlagen der Existenz* における引用の検証とテキストにおけるその意味

Subtexte に掲載されたこのテキストは2005年1月29日付けであり、前述のテキストの数ヶ月後に執筆されたものである。前述の前文に出てきた緑の本とは違い、グリム童話が *Landschaft* により分類されており、グリム

兄弟においてはその物語がどこで起こったのかが重要であったとのコメントからテキストは始まる。その導入のあとに以下の文章が続く。

Selbst den Bremer Stadtmusikanten, unbestreitbar aus Bremen, gab sie Flügel, auch über die Bremer Dächer hinweg, und die Geißlein im Wolfsbauch - ohnehin von Finsternis und Atemnot bedrängt - nahmen wohl erst nach ihrer Rettung die Gegend wahr, in der sie gefressen worden waren, den Gott oder die Götter, die den Massenmord zuließen.²¹⁾

ここには *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* では言及されていないホロコーストにおける強制収容所の生々しい様子を彷彿とさせる表現がでてくる。「狼のお腹の中にいる七匹の子ヤギたち」は「暗闇と窒息に苛まれ」ている。そして「救い出されたあと」になって「自分たちが食べられた場所を認識し」そして、「その大量虐殺をもたらした、神かあるいは神々」を認識する。グリムにとって重要であったという *Landschaften* は救い出された子ヤギたちの目には大量虐殺をもたらした神あるいは神々が支配する世界として認識される。「神々」と書いているのは、キリスト教以前のゲルマンの神々を指しているとも解釈できる。また、ヒトラーが自らを神格化しようとしたプロパガンダをも彷彿とさせる。ここで言及されている子ヤギたちは、グリム童話で救われる子ヤギたちを踏襲しているが、アイヒンガーが1972年に書いた *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* においては子ヤギたちは救い出されることはない。子ヤギたちの母親は、アイヒンガーのテキストでは「どこにしようとも一自らの悩みと自らの幸福にとどまって」(blieb - wo immer - im ihrem Jammer und ihrem Glück)²²⁾ おり、「それ以上の役割は仰せつかっていない」(Mehr schrieben sie mir nicht zu)²³⁾ といい、子ヤギたちを救い出さないのである。*Landschaften und Wetterlage der Existenz* におけるこの箇所はグリム童話における狼に呑み込まれた子ヤギたちが呑み込まれてしまった、「神あるいは神々」が支配する世界の不条理さと残酷さをはっきりと書いている。子ヤギたちの母親の箇所を自らの *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* から引用することで、その不条理さを示すとともに読者にその先のテキストへ誘ってもある。²⁴⁾ その箇所を締めくくるようにシオランが引用されている。

»Am Fuße eines Felsens kann man nicht anders, als kosmogonisch zu denken ... unwillkürlich geht man zur Hysterie des Ursprungs zurück.« (E.M. Cioran)
Ob es nur die ideale Landschaften sind, die solche Spiegelungen zulassen, die ursprünglichen Verrenkungen, und ob die Prädestinationen von der Weltgegend abhängig sind?²⁵⁾

上記のシオラン引用箇所については、Rétifの調査においてもまた執筆者の調査においてもシオランの元のテキストを特定することができていない。

「岩の下では宇宙進化論的な考えに行き着かないわけには行かない。... 知らぬ間に源のヒステリーにまで遡っているのである。」この引用はその前の文章からの流れでは唐突に出てくる印象を受けるが、シオランのテキストでは「岩の下」として示されている Landschaft が「もともとの脱臼」、つまりもともとあるべきところにはまっていない運命の元へとつながっているのだろうか、救済の予定説は自分が身を置いた環境によって左右されるのであろうかとアイヒンガーはここで問うている。

Rétifの調査によると、*Landschaften und Wetterlage der Existenz*には全文4頁の各頁において全部で5箇所のシオランの引用があるとされ、そのうち上述の箇所は原典不明、もう一箇所は *Vom Nachteil, geboren zu sein* であり、二箇所は *Die verfehlte Schöpfung* そして最後の一箇所が *Syllogismen der Bitterkeit* からであるとしている。しかしアイヒンガーのテキスト中、シオランの引用であると明記されているのは上記の箇所と最後の箇所、
„In einer Welt ohne Melancholie würden die Nachtigallen anfangen zu räuspeln«, meint Cioran“,²⁶⁾ この2箇所のみである。他の箇所については、例えば
»Es gibt kein schlechtes Wetter.«, »im Abseits« など、括弧付きでテキスト内の他の引用、例えばムージルやその後に出てくるアイヒンガーの曾祖父が言った言葉と同様にテキストに織り込まれている。しかし一つ目の例はコンテキストからしてシオランのテキストではないし、執筆者の調査ではシオランの原文には見当たらない。次の im Abseits は短すぎてシオランの引用であるとするにはこころもとないが、シオランの間接的引用であることを考慮し、シオランの *Werke* の中には似たようなフレーズがあるので検討

してみたい。アイヒンガーのテキストには、

Das meiste ist Wetterabhängig: Flauten, Krämpfe, die Angst, »im Abseits« zu landen. Zauchtel, der Geburtsort meiner Großmutter, lag gleich im Abseits: ein unwiderruflich trostloses Straßendorf in Ostmähren, durch seinen Bahnhof ein »Verkehrsknotenpunkt von transkontinentaler Bedeutung.«²⁷⁾

シオランのテキストについては、アイヒンガーが読んでいたとされる本の中ではなく、*Werke* 中の *Leidenschaftlicher Leitfaden* 中のテキスト 65 に以下のような一節がある。

Die Angst, ins Abseits zu geraten, und der bluttriefende Zauber des Anderswo lösen die Antwort mittelmäßiger Instinkte aus, und vermittelt theoretischer Zufluchten setzen wir uns gegen das unmittelbare Unendliche des Herzens zur Wehr. Ordnung im Denken hält das Herz nieder. Ordnung im Denken ist der Tod des Herzens. ... Indem die Gedanken aneinandergekettet werden, verschwindet die Gefahr. Und es verschwindet auch die Verflüchtigung des Ichs. Wir werden fest.²⁸⁾

シオランによると、「はずれた場所に身を置く不安」、「どこか違う場所という血が滴る魔法」が我々を「理論的な逃げ場」を用いて「心の直接的な無限」へ行くことを妨げているという。ここでは「思考の秩序」と「心の死」は同義とみなされる。これは、シオランがシステムチックな思想を拒否し、体系に反逆する形でアフォーリズム形式に自らの思想を表現したことの一つの裏付けとなる考えである。シオランのいう「はずれた場所」(Abseits) は人間が思考する上で心の死を免れるためにいるべき場所であり、自らの思想によってたどり着くべきところでもある。しかしアイヒンガーの祖母はそもそも生まれ落ちた場所が Abseits であることを運命づけられている。ここでこの両者の Abseits を同義として理解することには無理があろう。アイヒンガーはここで、もともと Abseits に生まれた運命の地をムージルやフロイトの地縁と結びつけ、「思考を結びつけてゆくこと」によって、祖母の存在、「私の蒸発を消去」し、祖母の生誕地とその存在に確固たる場所を与えようとしている。このように読んでゆくと、アイヒ

ンガーはシオランの言葉を用いつつそこに自らの意味を付与し自らのテキストを展開していくための契機としていると捉えることができる。

アイヒンガーは自らの源、自分にグリムの物語を語って聞かせてくれて、そして子ヤギのようにホロコーストに呑み込まれて救われることのなかった祖母の生まれ故郷に想いを馳せる。グリムの物語を取り囲む Landschaft が意味を持っていたように、祖母の生まれ故郷である Zauchtel はローベルト・ムージルの *Die Verwirrungen des Zöglings Törless* の舞台となった「ロシアに続く」「小さな駅」のモデルであるムージル自身の「陸軍教練団員としてのメーリッシュ・ヴァイスキルヒェンの軍隊学校」(als Kadett einer Militärschule in Mährisch-Weißkirchen)²⁹⁾ から「ほんの数キロ」(nur wenige Kilometer) 離れた場所にあり、「その近くの小さな街はフライベルク、ジークムント・フロイトの生まれ故郷」(Der nächste kleine Ort in der Nähe ist Freiberg, wo Sigmund Freud geboren wurde.)³⁰⁾ である。ここではムージルの *Die Verwirrungen des Zöglings Törless* の冒頭部分そのまま引用されている。

»Eine kleine Station an der Strecke, welche nach Russland führt. Endlos gerade liefen vier parallele Eisenstränge nach beiden Seiten zwischen dem gelben Kies des breiten Fahrdamms; neben jedem wie ein schmutziger Schatten der dunkle, von dem Abdampfte in den Boden gebrannte Strich.«³¹⁾

このパラグラフでは、シオランの引用から引用元が不明な引用符のついたフレーズを経て、祖母の故郷にゆかりのムージルの引用へと転換されている。

Zauchtel は当時のオーストリア・ハンガリー帝国の中にあり、現在はチェコ共和国にある街である。アイヒンガーの祖母の故郷は、ハンガリー系で現在のチェコで軍隊学校に通っていたムージルや、ユダヤ系のフロイトの故郷であるオーストリア・ハンガリー帝国のスラブ、ユダヤ、ドイツ系の入り混じった、東方に続く場所として地理的に規定されている。そして、その生まれ出た場所によって存在が規定される運命がここで端的に描かれる。

Während Freud später zum Glück gerade noch aus Wien fliehen konnte, führte

die letzte Fahrt meiner Angehörigen im Viehwaggon zurück in den Osten, »endlos gerade die Eisenstränge«. ³²⁾

フロイトがロンドンへ逃れたのに対して祖母を含む親族は家畜用の貨車で東へ、つまり強制収容所へ連れて行かれた。1970年代にグリム童話を「パリンプセスト的」に上書きして表現し、寓話的な物語の中で完結させていたその背景がここでは直接的に言及されている。1948年に発表された *Die größere Hoffnung* を書いたのち、戦争体験を直接的に書くことをやめて、直接的なモチーフを隠すように描いていた時代に *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* は書かれた。この作品が発表された当時はほとんど注目も集めず、また本作がホロコーストを扱った作品と理解されていたかどうかも疑わしい。それを2004年に再び刊行しなおした直後にアウシュビッツ解放60年をテーマに依頼された新聞コラムにおいてはその執筆依頼に応える意味もあったであろう。この時代に記憶の風化に対する危機感もあったであろう。1980年代後半にアイヒンガーが *Kleist, Moos, Fasane* で自分の祖母の台所について書き始めて以来、*Film und Verhängnis* を経て、最も直接的に書かれ、また自らの作品を引用して解説を加えるというアイヒンガーにしては非常に珍しいことを行っているテキストである。

祖母の生まれ故郷を地理的に規定したのち、さらに祖母の誕生日にまで言及は及ぶ。2月29日という4年に一度しか訪れない誕生日。祖母の生まれ落ちた土地だけでなく、その誕生日は人生の「天気」(Wetterlage) ³³⁾をも決定付けていた。

4. 曾祖父とアウシュビッツ、そして引用

その後、テキストは祖母の父であるイスラエル・ラビネク、アイヒンガーの出自のさらに一つ先の代へと話が進む。彼は「北鉄道員」としてハプスブルク帝国の鉄道建設に携わり、シーベンブルゲンの鉄道建設に従事した。そしてアウシュビッツ駅の駅長になった。曾祖父の言葉と思われる、「わしが触るものはみんなクズになる」(»Was ich anrühre, wird Mist.«) ³⁴⁾ に彼の死後アウシュビッツがどうなったのかが暗示されている。

そして、その曾祖父が働いていた鉄道に続くウィーンの3区の *Holweggasse*

にある祖母の家は北鉄道の関係者が集まり、すぐ下を鉄道が走る場所にあった。その地区はのちに「Fasanen 地区」と呼ばれるようになる。³⁵⁾ ここで、*Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* と並んで、アイヒンガーは自らの作品 *Kleist, Moos, Fasane*³⁶⁾ を示唆している。

Meiner Schwester und mir blieben die »Nordbahnerjause« bei unserer Großmutter in der Hohlweggasse, (...) die Züge der Verbindungsbahn, welche die halb geschlossenen Fenster klirren ließen, die obere Bahngasse, die untere Bahngasse, die linke und die rechte Bahngasse, der Himmel über dem dritten Wiener Bezirk und die Lastzüge, die wir zählen konnten, solange es hell war, in dieser Gegend, die später Fasanviertel hieß.³⁷⁾

ここに書かれている内容は *Kleist, Moos, Fasane* の祖母の台所の内容を凝縮して書いたものである。ここでは、引用の形式をとってはいないが、気付き読者にはわかるような仕掛けになっている。

そして、その次にシオランが引用されている。

»In einer Welt ohne Melancholie würden die Nachtigallen anfangen zu rüpseln.«³⁸⁾ meint, E.M. Cioran. In zwischen scheinen die Nachtigallen in Auschwitz wieder möglich zu werden.³⁹⁾

唐突な印象を受ける引用である。出典は *Syllogismen der Bitterkeit* の中の *Zeit und Anämie* のアフォリズムの一つである。アフォリズムの形式で書かれており、このフレーズは単独で前後のアフォリズムとも直接的なコンテキストに組み込まれた文章ではなく、全く独立したものである。このフレーズもまた、一つ目のシオランの引用と同様、その前のテキストの流れからすると唐突な形で出てくる。次のパラグラフへの転換の契機として使われていることがわかる。それまでアイヒンガーの祖母と曾祖父そして北鉄道からウィーン 3 区までを巡る一種メランコリックな回想を一気に覚ますような効果がこの「メランコリーのない世界では小夜鳴鳥もげっぶするだろう。」という無作法なまでのフレーズにはある。そのげっぶする「小夜啼鳥」(Nachtigallen) が今ではアウシュビッツにもいるという。時代は過ぎ

去り、アウシュビッツもまたメランコリーをたたえて語られるような世界ではなく、語られた歴史物語で満腹になり、小夜鳴鳥もげっぶをするようになったのであろうか。アイヒンガー宅へ掃除に来る家政婦が自分の故郷について語る、»Auschwitz ist scheen, Frau Aichinger.«に出てくる Auschwitz はメランコリーのかけらもない。Auschwitz の Landschaft はアイヒンガーの曾祖父のいた時代のものとも第二次世界大戦のものとも違う Landschaft になっている。

5. まとめ

Das grüne Märchenbuch aus Linz と *Landschaften und Wetterlagen der Existenz* の間には見てきた通り、1978年から2004年の間の時間の経過を経たテキストに対するアイヒンガーの方策の違いがある。両者をシオランのテキストをはじめとした引用でつなぎ、テキスト間の関連性を強く示唆しようとしたのが *Landschaft und Wetterlagen der Existenz* である。そのなかでシオランのテキストはアイヒンガーが様々なテキスト引用をする中で、特に2004年からの作品群においては一つのバロメーターになっていることがわかる。*Das grüne Märchenbuch aus Linz* では、グリム童話との対比によりグリム、シオラン双方のテキストに対するアイヒンガーのスタンスが明らかになる。また、*Landschaften und Wetterlagen der Existenz* ではシオラン引用とムージルの引用との対比、また曾祖父や家政婦の言葉への橋渡しとして、アイヒンガーのアクロバットの的なテキスト転換の起爆剤となっていることがわかる。

注

- 1) アイヒンガーテキストにおけるシオラン引用については、主に Rétif, Françoise: „Von der Unannehmlichkeit, auf der Welt zu sein.“ *Ilse Aichinger und Emil M.Cioran: Schreiben aus Ressentiment?* (in: Fußl, Irene/Gürtler, Christa (Hrg.): *Ilse Aichinger »Behutsam kämpfen«*, Würzburg 2013. S. 175-193) (Rétif 2013) の中で引用箇所の最初の特定制業がなされ、その引用の中にくつもの方法が見られることが指摘されている。
アイヒンガーがシオランを引用し始めた動機については Hammerbacher, Franz: *Die Kolumne »Schattenspiele«=Das Buch »Subtexte«* (in: Arnold Heinz

Ludwig (Hrsg.) : *Text und Kritik (175) Ilse Aichinger*, München 2007. S. 99-101) に詳しい。

また、真道 杉：「イルゼ・アイヒンガー後期作品における E.M. シオラン引用について」(『リュンコイス』50号 2017, S.107-122) (真道 2017) においては、Rétif の論考では明らかにされなかった引用箇所の特定と引用方法の方法についての分析をしているが、引用箇所についてはまだ明らかになっていない部分が残る。

- 2) Aichinger, Ilse: *Subtexte*, Wien 2005. (Aichinger 2005)
- 3) 同上 S. 13-16.
- 4) Aichinger, Ilse/Brüder Grimm: *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein*, Wien 2004. (Aichinger 2004)
- 5) Aichinger 2004, S. 23.
- 6) Aichinger, Ilse: *Gare maritime*. (in: *Auckland. Hörspiele*, Frankfurt am Main 1991.)
- 7) Rétif 2013, S. 179.
- 8) Aichinger 2004, S. 5 参照。ここに作品のタイトルが列挙されている。
- 9) Ebd.
- 10) Ebd., S. 179.
- 11) 同上
拙論 (真道 2017) に於いても、実例を挙げて引用の方法に原文をそのまま引用しているものと、孫引き、そしてテキスト一部の書き換えがあることを指摘している。
- 12) 今回の調査では、Franz Hammerbacher 氏による証言をもとに、(真道 2017) において調査をした文献に加えて、Stözel, Thomas und Simone: *Zersplitternde Gewißheiten*, Suhrkamp Taschenbuch 2002. の文献も調査対象とした。
- 13) Rétif 2013, S. 179.
- 14) Aichinger 2004, S. 5.
- 15) Ebd., S. 7.
- 16) Ebd., S. 8.
- 17) Ebd. S. 7.
- 18) Ebd. S. 8.
- 19) アイヒンガーの *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* については真道 杉：

今の時代にメルヒェンを物語ることーイルゼ・アイヒンガーの『狼と七匹の子ヤギ』『リェンコイス』第41号2008.97～108頁参照。

- 20) Aichinger 2004, S. 8.
- 21) Aichinger 2005, S. 13.
- 22) Ebd.
- 23) Ebd.
- 24) Aichinger 2004, S. 21.
- 25) Aichinger 2005, S. 13.
- 26) Ebd. S.16.
Cioran, E.M.: *Syllogismen der Bitterkeit*, Frankfurt am Main 1990. (Cioran 1990) S. 31.
- 27) Aichinger 2005, S.14.
- 28) Cioran, E.M.: *Werke*, Frankfurt am Main 2008. S. 674.
- 29) Aichinger 2005., S. 14.
- 30) Ebd.
- 31) Musil, Robert: *Die Verwirrungen des Zöglings Törless*, Wien 1906. S. 1.
- 32) Aichinger 2005., S. 14.
- 33) Ebd. S. 15.
- 34) Ebd.
- 35) Ebd., S. 16.
- 36) Aichinger, Ilse: *Kleist, Moos, Fasane*, Frankfurt am Main 1991. S. 11-18.
- 37) Aichinger 2005., S.16.
- 38) Cioran 1990., S.31.
- 39) Ebd.